〈一 冊 の 本〉

『親子という病』

香山リカ著

講談社現代新書　700円（税別）

いつの時代も、親子の間には複雑な問題が潜んでいる。家族が濃密な感情共同体として存続する限り、親を否定していく子世代との対立・葛藤はついてまわる。

フロイトの有名な中心的概念に「エディプス・コンプレックス」がある。これはギリシア神話のオイディプスの悲劇から名づけられたコンプレックスで、男の子が抱く母親への愛情と父親への敵意、去勢不安などを含んでいる。日本では「父親殺しとしてのエディプス」は意外なほど少なく、最近は父親に過剰に同一化する仲良し父子が目立つという。かわって「娘が父親を殺す」事件がいくつか起きている。父親に嫌悪感を抱き、その父親に苦しめられている弱い母親を守るために、父親に制裁を加え、成敗する娘たちが増えているのである。筆者は現代の無差別殺人の背景も深く分析して、親の子どもへの無意識の敵意と、子どもが自分を取換えのできる無意味な存在（代替可能性）と考えているのではないかと指摘する。

親から「おまえは本当はうちの子じゃない」「おまえは橋の下から拾ってきた子だ」と言われた体験は全国的に広がっており、子どもは大半が冗談と受け取るものの、中にはひどく心を傷つけられ、自分の出生に疑惑をもち続け、いつまでも親子関係でもがき苦しむ人々がいる。「四歳位の時、手をつなごうと思って母さんの手に入れた瞬間、チッと舌打ちして私の手をふりはらった」（佐野洋子「シズコさん」新潮社）といった記憶は、母親への素直な愛情を持てず、罪悪感や自己嫌悪に苦しむ娘として生きることになる。認知症になった母親を高級老人ホームに入所させた行為も「私は母を捨てた」という「自責の念」となり、より屈折した思いになってしまう。

この「私は母親を捨てた」と受け取る背後に、根強い「母性愛神話」を筆者はみるのである。「親には必ず母性愛があり、その親に愛されなかったのは私が悪かったせいだ」と自分を責めると、せめて「必要とされる私、役に立つ私」になることで存在根拠を得ようとする。しかし母親と距離をおくこの行為が、かえって自分の存在根拠を無くす逆説を味わう。「愛の不在」は自分の「存在根拠の不在」に容易に転化する。息子が母のあふれる愛を疑わないのに対して、娘の心の奥には「私の代わりに息子が生まれればよかったのでは」「私ですみません」という罪悪感があるのではないかと筆者は言う。母親は「だとしたら私の思い通りになりなさい」とますます支配を強めてくる。

この「母性愛神話」は息子たちに愛の幻想をもたらし、「何があっても母親は息子を愛するもの」という幻想は、母親の関心を引き、その愛を確認しようとの捨て身の無差別殺傷事件に走らせているのではないかと分析している。現代を読み解く一冊である。

（本研究所研究員　大野哲夫　社会心理学）